

ということを心から感じ、涙がとめどもなく流れた。

九月二十八日九時、奉天（瀋陽）行の列車に満人達の謀いで密かに機関車内に乗車し、涙を流し固い握手をかわし、別れを惜しんだ。

撫順城駅に着いたのが午後三時過ぎで、またこの時も幸運に同乗列車から一団の難民が下車した。私も急いでこの団体に入り撫順市に向かった。

この撫順市に入る手前に大きな川がある。その橋のたもとには、ソ連兵と八路軍の歩哨が立っていて日本人の城内進入を見張っている。この時も、さも開拓団難民のように子供をおんぶしたり、手をつないだりして、見事に撫順に進入することができた。そうしてようやく夕方、梅河口工務区の連中に避難先の氷安台小学校で会うことができた。

思えば、八月八日、東安を脱出してから五十数日目である。長い長い遁走譜であった。

ここで前職場の鈴木水道助役の家庭の一員として同居し、また撫順での避難先にも苦難はあったが、何と

か昭和二十一年六月中旬、コロ島から引き揚げ、舞鶴にお盆の七月十三日上陸、生まれ故郷の山梨には七月十六日帰郷できた。

北支から満州、

そしてシベリア

愛知県 久保田 禮 三

長野県下伊那郡阿南町で父富治、母みきよの間の四男二女の三男として生まれた私は、徴兵検査で甲種合格となり、入隊まで家業である農業と養蚕を手伝っていました。

長兄は軍曹としてシンガポール攻略戦を皮切りに中支、南支、スマトラと転戦中であり、次兄は十七歳で満蒙開拓の先駆者として東宮大佐の指揮下に入り、開拓義勇軍の前身である試験移民隊の一員として渡満しました。しかし活躍中に無理がたたたり、病を得て帰国、自宅で病死し、村葬までしてもらいましたが、遺

された日誌には三十八度の高熱にもかかわらず飛び回っていた様子が記してありました。

昭和十九（一九四四）年一月、群馬県高崎の東部第三十八部隊に入隊。一週間後に北支派遣軍要員として出発。舞鶴港より渡満、山海関を経由。北支駐屯の第三十六師団（陣二九九一、北京、岸川健一中将）歩兵第六十七旅団（豊台）独立歩兵第八十一大隊（陣二九九六・密雲）第五中隊（寺沢中尉・順義）に配属されました。

南口鎮で初年兵集合教育を受け、一期の検閲は大隊本部のある密雲で受けました。

教育中でも治安状況は悪く、特に共産八路軍の活動が活発で、第三中隊が山の中で待ち伏せ攻撃を受け大損害を被りました。

また、引き続き第四中隊が討伐中、部落で休憩中を襲われ、重機関銃を奪われる損害を受ける事件が発生しました。初年兵の私等も戦場掃除に出動しましたが戦死者は全員丸裸にされており、被服、装具、武器一

切、靴まで奪われ、機関銃隊長は手榴弾で自爆していました。

初めて見る戦場の悲惨さにびっくりしました。現在でも、その惨状は眼前に浮かびます。全くひどいものでした。

私は農業に見切りをつけ軍人として生きたいと思っていたので、一期の検閲が終わるとすぐに下士官候補者を志願して長辛店の下士候隊に入り、約六カ月の教育が終わると中隊に復帰、伍長任官を待たずに第四分隊長を命ぜられました。階級は下士官勤務兵長で、袖に山形の袖章をつけました。

昭和二十年に入ると南方の状況が緊迫化して沖縄派遣要員の訓練が開始され、連日、対米戦闘に備え匍匐前進主体の訓練で泥まみれに明け暮れました。

そのうち沖縄行きは不可能になりましたが、今度はソ満国境が危なくなってきたので関東軍の応援に行くことになりました。

関東軍の主力が南方へ引き抜かれたので、その後釜

です。関東軍の第三方面軍（後宮大将）第四十四軍（本郷中将）に編入され、第六十三師団は急ぎよ満州国西遼に列車移動することになりました。昭和二十年五月、移駐完了。八月、奉天（瀋陽）集結の命を受け、奉天到着寸前に終戦となり奉天ホテルで武装解除されました。

驚天動地の激変に身を処する術もなくただただ呆然となりました。その後はソ連兵の「ダワイ、ダワイ」の声にせきたてられ、貨車に乗せられ「トウキョウダモイ」にだまされ帰国の夢を抱きながら発車。途中、北向きに走る列車に前途に大なる不安を抱きながら、バイカル湖を日本海と見誤り歓声を上げたのも束の間、到着したのはバイカル湖より西方のチェレンホーボ第二収容所でした。抑留生活の始まりです。

建物は半地下式の丸太組みの建物で、地上スレスレに小窓が点々とあり、ペーチカの煙突が十本あり、収容所としては割合と程度の良い方でした。しかし建物に入る直前にソ連兵と通訳がもめてソ連兵が怒り出

し、日本兵の持ち物一切が持ち込み禁止となり、一つで建物に入れられました。そのため満州から大切に持ってきた物がなくなり冬を迎えて大きな傷手となりました。

収容所に着いた翌日から作業でした。ここは石炭が豊富な地帯らしく、露天掘りが行なわれていて表土をはね除けて石炭の層を掘り出す。掘りつくすと表土で埋め戻す作業の繰り返しでした。

ペーチカの燃料は作業を終了して帰隊の時、各自が隠して持ち帰った石炭でまかないましたから室内は真冬でも比較的暖かく、その点は大いに助かりました。

しかしながら肝心の食料は劣悪少量で、馬の餌に使う燕麦の粥が飯盒の蓋一杯と塩辛い鮭の小片だけで日に日によせてゆきました。

作業の厳しさと零下二十度の酷寒に極度の栄養失調になり、悪いことに発疹チフスが発生しました。体を洗う浴場も無く、シラミがびっしりシャツに住みついていて環境の悪さに当然の衛生状態でした。高熱の末に死亡者続出です。治療設備も不十分ですからバタバ

々と倒れ、私の分隊員も半分がやられました。一日に三十人の死亡者が出たこともありました。

以上のような状態になり、労働に耐えられる者が半分以下になったので部隊は編成替えとなり、私は分隊長を解かれ一兵士となりました。

その頃、私も病に倒れ、日本の軍医さんの診断で肋膜炎と判定され、太い注射器で二本水を取ってもらいました。入院を命ぜられ他の二人と三人でベッドのある重患用の病室に入りましたが、翌朝二人とも死んでいました。食事が取れないほど衰弱していて可哀想でした。

しばらく入院して快方に向かった私でしたが、労働者の国ソ連では労働のできない病弱者は役立たず者と判定されたのだと思いますが、突然列車に乗せられンペリア鉄道を東に進み、やがてウラジオ経由で北朝鮮の古茂山収容所に送られたのです。昭和二十一年九月頃と記憶します。ウラジオに寄った時、カエルを焼いたのを勧められましたが食う気にならなかったものです。ウラジオには食用ガエルがいるようでした。

古茂山はシベリアより暖かく暮らしよい所でした。ここでの半年間は私にとって恵まれた期間でした。というのは、たまたま使役に出た先が接収された旧日本軍の糧秣倉庫で、ソ連兵のアンドリュウ軍曹が頭でした。

私は彼のお気に入りとなり倉庫専属の係りに抜擢され、収容所から通わずに倉庫で寝泊まりすることになったのです。まさに幸運でした。

糧秣倉庫ですから、食べる物はなんでもあるので。米、味噌、醤油、砂糖、缶詰などなんでもです。お陰様で肋膜炎も栄養失調もいつの間にか癒え、軍曹の信用もますます高まり、服装もすっかりソ連兵と変わり、そのうち馬車一台を専用に与えられ一人でもどこへも行けるようになりました。

そのうちダモイの話が耳に入り、収容所の仲間もいつの間にか姿が消えているのに驚き、独りだけ取り残されたのかと心配になってきました。ある日、収容所に帰ったら民間人が多数残っているのでひと安心しました。

昭和二十二年四月十五日頃、古茂山港で日本の船に乗せられ佐世保に帰りましたのが四月二十日でした。

長野の我が家に帰りましたら家族は皆無事でよかったです。長野ですから空襲もなかったのです。私の帰りを喜んでくれました。長兄も二十四年に帰りまして。

私は復員後も農業をやりましたが、北支、満州、シベリアと広大な大陸を見てきた私には、故郷の地形がいかに狭く、悪く、作業の能率が悪いのにつくづくいやになり、嫁をもらって一家を構えるに当たって思い切って他の地に移ろうと決心し、現在地の一宮町に開拓地を買い、移転したのが昭和二十四年の四月です。

鋤、鍬の人力で開墾し、一町四反の土地を確保し、水田二反と他は果樹園を経営するにいたしました。

果樹は最初、柿をやりましたが、現在ミカン園をやっています。私は学歴がありませんので、子供には大学へ行かせ、息子は現在名古屋市役所に勤め、娘は大学助手を八年間勤め、縁あって碧南の建設会社の社

長と結婚しました。

私も年ですから逐次事業の規模を縮小していくつもりです。現在私の最も気掛りなのは、分隊長の時の部下の消息が一人も分からないことです。収容所時代は、突然姿を消しても他の収容所に行ったのだろうと推測するしか仕方がなかったのです。元気で帰還してきてくれればと、祈るしか手段がないのが残念でなりません。

記録したものは引揚船に乗船時に一切没収され、姓は覚えていても名前は分からず、もちろん住所も分かりません。出身地は言葉の訛りから推測すると茨城県の人だと思えます。

それから戦後流行した『異国の丘』と『ハバロフスク小唄』は私の収容所で既に歌っていましたので作詞、作曲は不明ですが今でもはつきり歌えます。私の軍歴は半年不足です。